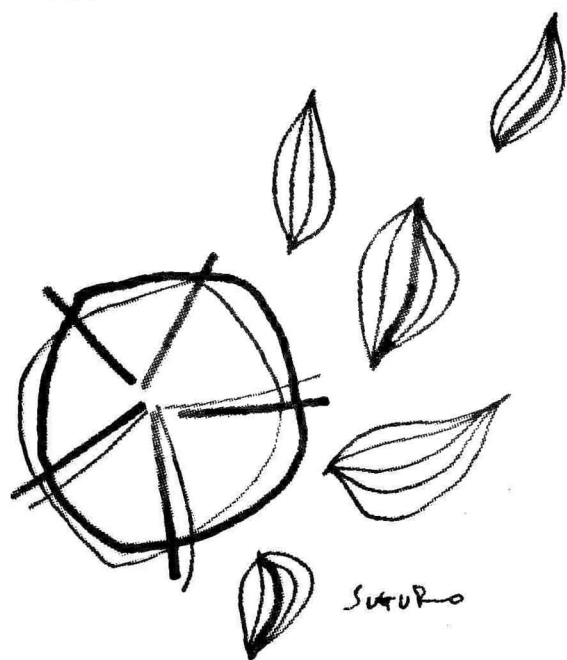


香港

百港

永漢



近代生活社

著者紹介 1924年台灣台南市生。
 1945年東大経済学部卒
 1946年台灣に帰り1948年香港に移住以来商
 業に従事す。
 主な作品・「密入国者の手記」「濁水溪」
 1955年「香港」により直木賞受賞
 現住所 東京都大田区田園調布1の2の11

香 港

昭和三年六月二十日 印刷
 昭和三年六月二十五日 発行

定価 貳百八拾円

地方 貳百九拾円

著者 邱 永 漢
きゆう えい かん

発行者 松 尾 金 治

印刷者 草 刈 親 雄

中央製本印刷株式会社

発行者 近 代 生 活 社

東京都豊島区池袋二ノ八八五
 電話(97)九七五五・九七六三
 振替東京一九四九〇番
 カバー・小宮山印刷株式会社

落丁本乱丁本はお取替いたします

香港
目次

香 港

第一章 自由の虜……………五

第二章 密輸船……………五一

第三章 海の沙漠……………九五

第四章 揺錢樹（かねのなるき）……………一四五

石……………一九三

華 僑……………二二三

雪中送炭の記（あとがき）……………三〇〇

題字 長谷川 伸 装幀 勝呂 忠

香

港

第一章

自由の虜

彼は追われていた。逃げる事が今の場合、彼の唯一の目的である。なぜ自分は追われているのか、なぜ自分は逃げなければならぬのか。それを反問するだけの余裕はなかった。原因はある。煎じつめて言えば地上にしか住む世界を持たない人間共の闘いに破れたのだ。人を殺したのでもなければ人の財を奪つたのでもない人間が絶えず何者かに追われながら生きるというのが戦後台湾の現実であつてみれば、生きのびるためには考えることよりも逃げ足が早いことが先づ第一の条件である。この条件だけではどうやら生れながらに備わっているらしい。ところが逃げる先のことになると、てんで方向感覚がなかつた。台湾島内では汽車があれば汽車に、トラックがあればトラックにとび乗つた。漸くのことで台湾から離れる機帆船に潜り込み、生命からがら厦門へ辿りついた彼が、厦門を離れる時は機上の人になつていた。一九四九年の初夏、南京決戦を前にして逃げ腰になつた国民党が台湾へ移動しはじめた頃のことである。

たしかこの飛行機の行先は香港^{ホンコン}の筈だ。が、離陸した飛行機が空に向つてぐんぐん上昇しはじめると、ただそれだけの理由で彼はすっかり愉快になつた。肩にかかつている空気の圧力が

上空にのぼれば、のぼるほど軽くなつて行くようだった。もつと上れ、もつと上れ、そして何もかも忘れてしまえ。

……あれから何時間か経っているのだが、頼春木はまだ完全に夢から醒めきつていない。ブローペラの音が相変らず耳元でガンガン鳴りつづけている。坐つていながら、だんだんと気が遠くなつて行くような気がする。

と、その時、彼の前に黙つて坐つていた男が突然大きな口をあけてアハハ……と笑つた。

「さつき君は余程驚いたようだね」

そう言われた瞬間に、春木は我に歸つた。それと殆んど同時に今までの経過が記憶の中に蘇つてきた。驚きはまだ生々しく、血液の中を駆けめぐっている。

今、彼が腰をおろしているのは九竜半島の飛行場に近い場末の貧民窟にある上海人の旗亭の中である。旗亭と言つても露店に少し毛の生えた、きたならしい掘立小屋で、油のにじんだ卓が三つばかり並んでいるだけで、彼と彼の前に陣取つた男の二人以外に客はいなかった。店先に饅頭を蒸す、大きな蒸籠せいろうがあつて、そこからシュンシュンと蒸気の立つ音がきこえてくるのが、エンジンの響きを連想させたに違いない。

旗亭の中には電灯の代りに、石油ランプが天井からぶらさがつている。クローム・メッキさ

れた新式のランプは石油がガス化されて小さな太陽のように激しく燃えるので、狭い部屋の中を真昼のように明るく照らし出している。

その明かりの下で見ると、自分の前に肘をついた男の痩せて骨ばった顔が妙に黄色味を帯びている。ただでさえ貧相な風貌をしているのに、身につけた短袖のシャツが疲れきつていて、ふけば飛ぶような、つまらない男に見える。

この男を最後の頼りに自分は遙々台湾からやつてきたのだ。この男があゝ李明徴なのだ。そう自分に言いかけようとするだけでも火が消えたような淋しさがこみ上げてくるのだった。

官憲に追跡されて、台湾中を逃げまわっていた春木が、点々と居所をかえた末に、或る友人の所へ転がり込んだのはつい一月ほど前のことである。仲間達が次々と捕えられては投獄されていたので、その友人は彼に香港へ渡ることをすすめてくれた。香港には自分の友達で李明徴という男が住んでいる。かなり手広く商売をやつていて、大邸宅を構え、自家用車も持つている位だから、きつと助けてくれるだろう。そう言つて、友人は紹介状を書いてくれた上に、自分で基隆港まで出かけて行つて香港へ渡るといふ機帆船に交渉してくれたのである。所が高い闇の船賃を払つて乗り込んだ船は、香港へ行かずに真直ぐ厦門へ直航した。厦門には用事がないので、港に着いても船中に頑張つているところへいきなり家財道具をもつた避難民が乗り込

んできた。船は内戦を避けて台湾へ渡る難民を乗せて又台湾へ戻るといふ。こうなると、どんなに騒いだところで勝負は明らかである。結局彼はカバンを一つ手にさげて厦門の街へ上陸するよりほかなかつた。

二カ月に及ぶ逃避行で、今は身も心も疲れ果てている。片時も早く目的地に辿りついて、ゆつくりした気持で睡眠をとりたかつた。懷中にはいくらも金がなかつたが、香港に着きさえすればどうにかなるだろう、と一途に思いつめて、厦門から香港行きの飛行機切符を買つたのである。

ところが実際に香港に着いて見て驚いた。手帳にしたためておいた住所を頼りに、潮州人の苦力に案内されて行つた所は、大邸宅街どころか飛行場のすぐ裏手の小高い丘の上にある貧民窟だつたのである。広いアスファルト道路から石橋をひとつ越えると、急に道幅の狭いゴツゴツした坂道になつており、その道をさしはさんで木造のバラックが並びの悪い歯のように出たり入つたりしている。彼がこの界限へ足を踏み入れた時は既に太陽が海に没した後で、茫漠たる飛行場の対岸に、香港の美しい夜景がまぼろしのように浮んでいたが、この一劃には電灯すら通じていないと見え、所々に薄暗い石油ランプがともっているだけであつた。

「おいおい。道を間違えたんじゃないか」

彼は不安な気分に襲われながら、自分の前をとつと歩いて行く案内の苦力を呼びとめた。

「いや、もつと奥の方ですよ」

苦力の声には絶対的な確信がこもっている。

鑽石山。英語でダイヤモンド・ヒルという燦然たる名前で呼ばれる土地がこんな所だろうか。香港に覇を争う一流の富豪が住んでいる筈の住宅区がこんな所にあるだろうか。否。きつと苦力は土地に不案内な奴なのだ。そう思いながら、彼は苦力の後を追った。

が、中へ入れば入る程、道幅はいよいよ狭くなり、じめじめした暗闇の中で、売れ残りの野菜や魚肉を売る広東人の商人達の奇矯な叫び声がきこえてくる。その間を通り抜けて、更に奥へ入ると、バラックがややまばらになつて、所々野菜の植えてある空地に出た。

「この家ですね」

と言つて苦力が突然立止つた。

「まさか」

春木は自分の眼を疑わずにはいられなかつた。それは家というよりは山小屋と言つた方がふさわしい位、粗末な木造のバラックだつた。家の中にはランプさえともつておらず、白い月光が屋根の上から路地へおちかかっている。

「李先生不在家？」
レイシサンバウム、イオケ

と苦力が怒鳴ると、

「来了」
ライラ

と奥から囁れた男の声が答えた。ややあつてのつそり出てきた小男が今、彼の前に坐つている李明徴こと老李なのである。
ラウレイ

啞然として春木は暫く物も言えなかつた。

「本当にあなたが李さんですか？」

「李明徴は私ですが、何かご用事ですか？」

と答えた小男の声は意外に落着いていた。漸くのことで、春木が来訪の目的を告げると、彼は少しばかりびつくりした様子であつたが、家の中へ入れとも言わずに、そのまま春木を誘つて、すぐ近所にあるこの饅頭屋へやつて来たのである。

ひどく空腹だつたので、春木は息もつかずに大きな肉饅頭を三つ平らげた。どうやら腹の虫がおさまると、今度は新しい心配が彼の頭を占領しはじめた。心配というよりは恐怖といった方が正しいかも知れない。生命が惜しくて逃げていた時は、ただ逃げることに夢中で、それから先のことは少しも考えていなかった。逃げおおせさえすれば、最後には金もあり、義侠心も

ある男がどこかで彼を救つてくれるような気がしていたのだ。無意識の中に彼は老李をそうした仮想人物に仕立てあげていたのである。

所が今、彼の前に坐つている小男は金持でもなければ、義侠心のある男でもなさそうだ。栄養不良で、三度の飯にも満足にありついていなさそうである。しかも、太い眉毛の下で、きらきらと敏捷に動く眼は、獲物をねらう鷹のように、油断も隙もない。現に彼の心の驚きまではつきり見すかしているではないか。

「多分、君は僕がここで大成功をしているときいて来たんだろう」

「……」彼が返事に窮していると、

「ね、そうだろう」と老李はもう一度繰返した。「とすると国の連中は皆そう信じているかも知れんな、李明徴の奴、香港で大金を握つた途端に、故郷も妻子も忘れてしまった。人間、貧乏しても正気で居られるが、金が出来ると気が狂つてしまうもんだと、そう僕のことを言つてやしなかつたかね？」

返事を期待してゐるのでない証拠に、彼は春木に相槌を打つ余裕をさえ与えなかつた。

「きつとそうだ。そうだと。でなければ君のように態々ここまで僕を尋ねて来る者があるものか。君はどう思ふか知らんが、これは僕にとつてはちよつと耳寄りな話なんだ。だつて君、

李明徴が香港で大成功をしているという話はこの僕自身が聞いたデマだからね。しかし、現実には勿論今君が見ている通りだ。これが僕の本当の姿なんだ。食うや食わずだ。その男が故郷の人達の間ではどれくらい成功者のように考えられているんだから面白いじゃないか。どうしてそんな猿芝居を打つ必要があるのかと君は不思議に思っているだろう。そのうちに君にもだんだんわかつて来るさ。早い話が香港くんだりまで流れて来て乞食同然の生活をしていると言われている花も実もないじゃないか。それよりは金を握つたら、何もかも忘れた奴と思われている方がいい。嘘から出た真という言葉もあるように、金持だ金持だと思われているうちに、本当に金持にならんと限らんからね。そして一旦金持になつてしまえばしめたものさ。世間なんて、何だかだと金持のことを悪くいうが、結局、心の中では金持を一番羨しがっているよ。が、そんなことはどうでもよい。一体全体、何だつて香港へやつて来たんだ？」

相手の素性が知れてくると、春木は真面目に今までのいきさつを話す氣になれなかつた。そんなことよりも後悔の方が先に立つのだ。なぜ前後の見境もなく、いきなり香港へ来てしまったのだろう。なぜ自分は二十六才の青年らしい分別を以て行動することが出来なかつたのであろう。しかし、裏返して見れば、こうした内省が出来るのはそれだけ余裕を取戻した証拠なのだ。少くとも今までの所、彼には未来も過去もなかつた。現在という刹那、それも恐怖に彩ら

れた利那が彼の前を遮つていたのだ。それはたとえて見れば驀進する列車に追われながら、一人鉄橋の上を死物狂いに走り続けるようなものである。一步踏みはずせば千尋の谷底だし、逃げ遅れればあわれレールの錆と消えさることを意味する。だから、彼は走つた。息もつかなくつた。鉄橋の盡きた所で生命掛けで飛び下りた。その瞬間は助かつたと思つた、だが、怖る怖る顔をあげた時、彼は盡きる所を知らない泥沼の中にころがり込んでいたのだ。

「じゃ、やつぱり政治犯か思想犯ですか」

「まあ、そうです」

と春木は小声で頷いた。

「それなら、もうここまで来れば大丈夫だ。香港じゃご覧の通り国民党も共産党もないからね。現にこの鑽石山には国民党の敗戦の将が難居しているよ。皆、大して変り映えのしない難民さ」
「本当ですか？」

「君に嘘をついてどうする。僕がぐだぐだと説明するよりも、そのうちに君自身が見たりきいたりするだろう。ここは又違つた世界なんだ。しばらく住んでいて見給え。考えが變つて来るよ。政治なんてそんなものを考えるのがばかしくなつて来るよ。だつてね、政治で人間が救えると考える位、甘い話はないものね。人間は何ものによつても救われやしない。救われや